

ひゅーまんらいつ

令和2年度 第10号



ジェンダー・ギャップ指数過去最下位だからこそ、今

「女性差別をしないで」



女子受験者への得点操作。このニュースを聞いたとき、私はショックを受けました。女性だということだけで差別をする人がいるということに悲しい気持ちにもなりました。

それは、東京医科大学での問題です。新聞記事によると、女子受験者の得点を一律に減点し、意図的に女子が少なくなるようにしていました。大学側の理由としては、女性は結婚や出産などで離職するケースが多いから、というものでしたが、私はその理由は間違っていると思います。女性が結婚や出産で「離職する」ことを、こうした不正の理由にするのは、大学の勝手な考えであり許される理由ではないと思います。まず、誰よりも差別を実感し傷ついたのは、本当は入学することができたかもしれない女性の学生です。医師になるため必死になって勉強してきた彼女らの努力を、大学はいとも簡単に、間違っただけで切り捨てました。それは、彼女らの未来をうばうだけではなく、本当に優秀な医師を失ってしまった私たち社会の損失でもあると思います。

更に傷ついたのは、今、それぞれで自分の夢や目標に頑張る私たち少女です。私は今、高校受験のために男子と同等に一生懸命に勉強していますが、入試で男子だけが加点される仕組みがあったという報道を聞き、フェアじゃないと感じました。「同じ努力をしているのに女性は差別を受ける」と感じた少女の中には、進路や職業選択のときに夢や未来を諦めてしまう人がいるかもしれません。この問題は、頑張る全ての女性の未来をくもらせた、とても深刻な問題です。

では、今回の得点操作の問題はどうすればよかったのでしょうか。私は、「離職する人が多いから、女子の医大入学者を減らす」のではなく、離職する人が多いのなら、両立できるための支援をすべきだと思います。短時間勤務制度を設ける、託児施設を増やすなどの制度的な支援や、女性だけでなく男性も子育てを積極的に行う意識を持ってもらう啓発を進めるなど、さまざまなアイデアが浮かんできます。「できないから、排除する社会」より、より豊かで創造的な社会の方が良いに決まっています。そしてそんな社会になれば、若い女性の未来も少しずつ明るくなっていくと思います。

私の身近な出来事として、ある先生が発言した内容に衝撃を受けたことがありました。その先生は、学校の先生になりたいという女子生徒に、「女性教諭は大変だ。仕事だけでも大変なのに、家に帰ってから家事とか子育てがあるから」と言いました。私はそれを聞いていて、驚きと悲しみをかくすのに必死でした。先生の発言には、女性が家事や育児をするものだという決めつけがあるように感じたからです。先生は、男子生徒にも同じような発言をするのかなと思いました。私たち中学三年生は今、進路を考える時期です。じゃあ、私たち女性はいったい何の職業に就けばよいのかと分からなくなりました。

日本は、男女格差の現状を示す「ジェンダー・ギャップ指数」(※2017年のデータ)で、世界での順位が144か国中114位となっています。先進国の中でも最も低い順位であり、他の国と比べても非常に低いと感じました。日本は、科学技術や産業では発展しているのに、性による差別という人権や暮らしの根底に関わるようなことはまだまだ改善されていません。それは、とても残念なことです。

今回の問題は、女性への差別がまだ残っているということ、私たちにはっきりと見せる出来事でした。人口の半分が女性である以上、女性にとって暮らしにくい社会というのは、本当に豊かで創造的な社会と

はいえません。性別にとらわれず、その人がその人らしく自由に未来を選ぶことのできる社会、それが豊かな社会だと私は思います。そうなることで、みんな生き生きと楽しい人生になり、一人一人の特性や強みを生かせる社会になるでしょう。今回のような問題はもう起こらないでほしい。女性の未来をうばわないで。女性差別をしないで。

宮崎県宮崎市立宮崎西中学校3年生の作文から[法務局人権作文優秀賞(2018年)]

※今年度の日本のジェンダー・ギャップ指数

世界各国の男女平等の度合いを指数化した「ジェンダー・ギャップ指数2020」報告書が、2019年12月17日に世界経済フォーラム(WEF)により公表されました。この報告書は、経済、教育、保健、政治の4分野14項目における男女格差の状況を指数化し、国別に順位をつけたものです。報告によると、調査対象の153カ国中、1位は11年連続でアイスランド、日本は、過去最低の121位(2018年は110位)で、主要7カ国(G7)では最下位でした。

2018年8月、東京医科大学が女子に対して入学試験において一律減点をしていたことを内部調査の結果として公表した。そこで、厚生労働省が全国81大学を調査したところ、複数の大学が不適切な得点調整をしている疑いが生じた。その後、2018年10月に相次いで複数の大学が得点調整を公表し、計10大学の医学部が募集要項には記載のない不適切な得点調整を行っていたことが明らかとなった。この事、不合格となった女子生徒、または、浪人して受験した生徒に不利益が生じている。

考えてみよう!!
なぜ、アイスランドは1位なんだろう?
()



アイスランドは↓ここ!



「若い人を、テーブルにつかせてください」アイスランド女性権利協会事務局長の言葉

アイスランドの急速な進化の背景には、女性が主体となりながらも男性をも巻き込んだ草の根運動と、変化を恐れなかった国民の前向きな姿勢が垣間見える。アイスランドは、人口約35万人の小さな国だ。「日本には、アイスランドと比べ物にならないほどの人的資源があるはず。世界から学びながらも、他の国のロールモデルにならないといけない」と話すブリュンヒルドゥルさん(アイスランド女性権利協会事務局長)。日本の若い世代へのメッセージとして「とにかく、**当事者として参加することが大事**」とし、「**若い人に、発言の機会を与えること。若い人を、テーブルにつかせること。議論に参加させることが大事**」と、力強く語ってくれています。

感想をまとめよう!!

<取材・文/汐風ひかり>ハーバービジネスオンラインより引用

()年()組 氏名()